

(1) 遺跡の立地

新田原段丘面からのびる丘陵の南西端部に位置する。標高は約72mで、調査区は南にむかって緩やかに傾斜している。

(2) 調査の概要

弥生時代中期～古墳時代の遺物を包含する黒褐色土（Ⅲ層）の掘り下げを行った後、K-Ah上面で遺構検出作業を実施し、竪穴住居6軒を確認した。さらに、縄文時代早期の遺物を包含するM B O（V層）で遺構検出作業を実施し、集石遺構が19基、石器ブロックを1箇所、礫群を4基確認し、土器、石斧、石鎌、磨石等が出土した。さらに、Kr-Kbまで掘り下げ遺構検出作業を実施し、炉穴を10基、陥し穴を1基確認した。旧石器時代の遺物を包含するKr-Kbでは石器ブロック2箇所と礫群を確認し、ナイフ形石器や敲石が出土している。今回の概要報告では、弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構を中心に記述する。

① 弥生時代中期～古墳時代初頭

竪穴住居を6軒（S A 1～6）、土坑を10基確認し、壺、甕、高杯、ミニチュア土器、石鎌、鉄鎌、石斧等の遺物が出土した。

S A 1は、5.0m×4.5mの方形プランで、掘り込みの内側の壁に沿って柱穴がならび、中央に主柱穴が2基ある。柱状の炭化材が出土しており、焼失住居と思われる。貼床上で鉄鎌が出土し、共伴する土器の型式から弥生時代終末と考えられる。

S A 2は、4.0m×3.5mの方形プランで、出土遺物は少ないが、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期が考えられる。

S A 3は大型の住居である。一辺6.0mの隅丸方形プランで、主柱穴が中央に8基めぐる。貼床上に焼土を伴う土坑がある。遺物は、弥生時代中期に比定される方形透かし入り高杯を始め、主柱穴から石斧が、埋土から多くの磨製石鎌が出土している。

S A 5は一辺3.0mの方形プランで、S A 1同様柱状の炭化材が出土し、焼失住居と考えられる。弥生時代中期に比定される円形浮文をもつ壺や砥石等が出土している。柱状の炭化材には柱を組み合わせるために使ったと考えられる枘穴も確認された。

S A 6は、4.0m×3.0mの方形プランで、古墳時代初頭と考えられる。埋土から鉄鎌が出土している。

(3) 小結

本遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構、遺物が確認された。

弥生時代中期の遺構については、大型住居（S A 3）と小型住居（S A 5）が単位となった構成も想定されるが、調査区外への広がりも考慮しなくてはならない。S A 3は、多くの磨製石鎌とその剥片が出土しており、製作の場としての性格が考えられる。また、S A 1、5の炭化材については、遺存状況が良好であるため、詳細な分析を行いたい。

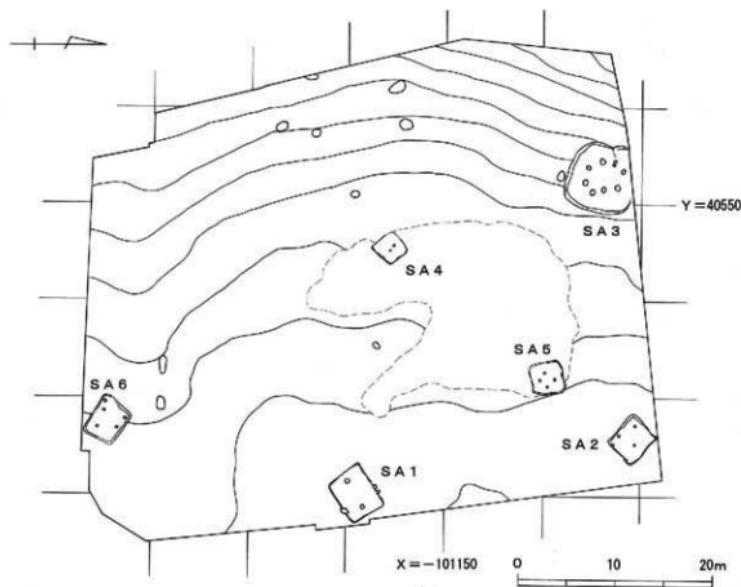
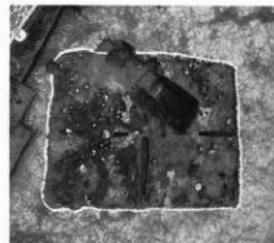


図36 弥生時代中期～古墳時代初頭遺構の分布 (1/500)



写真49 左：遺跡全景（東より）



右上：SA1（焼失住居）（東より）



右下：SA3（北より）

(1) 遺跡の立地

新田原台地の南西部、藤山川流域沿いの低位段丘面に位置する。標高は26m。丘陵との比高差は約40mを測る。

(2) 調査の概要

本年度の調査では、調査対象地のうち国の所有地の調査を行った。確認調査において、縄文土器などの遺物の包含層が存在すること、集石遺構が検出されたことが報告されていたので、本調査は、包含層の掘り下げを行い、集石遺構の検出されたMB 0（V層）まで調査を実施した。

古墳時代の遺物を包含する黒色土（I層）、古墳時代～縄文時代後期の遺物を包含する明黄褐色土（II層）、縄文時代後期の遺物を包含する暗褐色土（III層）の掘り下げを行った後、K-Ah（IV層）上面で遺構の検出作業を実施した。その結果、K-Ah上面では遺構は検出されなかつたので、MB 0の掘り下げを行ったところ、集石遺構が1基検出された。

黒色土（I層）は、ほとんど削平され一部残存していたが、古墳時代の須恵器杯が1点出土した。

明黄褐色土（II層）からは、古墳時代の土師器と縄文時代後期の土器、石錐等の石器が出土している。

① 縄文時代早期

確認調査で検出された集石遺構のあるトレンチを拡張したところ、散礫が検出された。その広がりを確認し、礫の取りはずしを行ったところ、集石遺構は1基であることが確認された。集石遺構は径約3.0mあり、比較的大きな礫が使用されている。埋土は黒色で集石の中心部分に集中していた。掘り込み面は確認できたが、MB 0（V層）の下層は礫を含む層であるために、集石との境目が明瞭でなく、配石は確認できなかった。

(3) 小結

今回の調査では、古墳時代の土器、縄文時代後期の土器・石器が出土し、縄文時代早期の集石遺構が検出された。遺跡は東側に傾斜し南側に下っていく窪地状であり、遺物もこの窪地に集中している。このことから遺物は流れ込みとみられ、北側になだらかに傾斜する段丘面があることにより、古墳または住居などの遺構の存在が推定される。集石遺構の時期については、K-Ah下位で検出されており縄文時代早期とみられるが、堆積状況からK-Ahは二次堆積の可能性もあり、検討を要する。

このように、遺物の出土状況から古墳時代、縄文時代の遺構の存在が考えられるが、今回の調査は調査対象地の一部の調査であったので明らかにできなかつた。来年度以降の調査によってその状況が明らかにされるものと思われる。



写真50 散砾検出状況



写真51 縄文時代早期集石造構

第IV章 まとめにかえて

この章では今年度の調査成果について、時代ごとにまとめる。

なお末尾に掲げた表8は、第I章第4節の層序に関する記載（基本層序の認定と略号の使用）を受けて、K-Ah以下の層における遺物の出土状況について現段階でまとめたものである。南（新富町側）に位置する遺跡から北（川南町側）に向かって記載し、各遺跡の層序（ローマ数字）と遺物（記号）を記している。遺物が出土した層については、礫群は除外している。また製品が出土した層では剥片は除外した。

(1) 旧石器時代

川南町銀座第2、銀座第3（A地点）、湯牟田、高鍋町野首第2、唐木戸第1・第3、小並第1、牧内第1、新富町音明寺第2、東畦原第1・第2、西畦原第2、勘大寺、尾小原、向原第1の各遺跡で調査が実施された。台地上の遺跡の実に9割以上で旧石器時代遺跡が確認され、AT上位の資料のほか、とくにAT下位のMB2～MB3の資料数が急増している。ML3以下は、小並第1遺跡のAso-4の二次堆積中で炭化材が少量確認されたほかは、石器群・礫群とともに未確認である。

礫群は、ATを挟んで様相が変化する。AT下位では、比較的大きめの完形の円礫～亜角礫で構成され、非赤化礫も多くみられる。礫の密集度が高い礫群は少數であり、散漫な礫の分布を示す礫群が多く確認されている。これに対しAT上位になると、破碎した赤化礫で構成されることが多く、礫の密集度も高い。礫群と重なって石器ブロックが確認される場合も多い。

石器群の出土状況は、AT下位のMB2下部～MB3と、AT直下にあたるMB2上部～Kr-Kbとで大きく異なる。AT下位のMB2下部～MB3では礫塊石器が目に付き、ナイフ形石器・剥片・石核等が散漫に分布する状況が多くみられた。これに対し、AT直下MB2上部～Kr-Kbでは、剥片石器の量が増加し、大量の碎片を伴う石器ブロック等も確認されるようになる。ナイフ形石器や角錐状石器等、明確なトゥール類を多くみる点も、礫塊石器の目立ったMB2下部～MB3の石器群と異なっている。

また、石器ブロック別の器種構成に注目すると、湯牟田、唐木戸第1の各遺跡のような、トゥール類を持ち込んだような、石器製作の痕跡が希薄な状況と、ほかの多くの遺跡で確認された、碎片を多く伴うような石器ブロックのある状況の二者に大別される。今後、石器の分類にあたって、出土状況も十分に考慮して進める必要が指摘される。

石器群の変遷については、現時点での予察を提示した。変遷の特徴は周辺地域のそれに近いものの、礫塊石器の多さ等いくつかの相違点もみられる。礫塊石器については、MB2下部～MB3のものに敲打痕・磨痕等の明瞭でないものも多く、今後、礫群構成礫との法量比較や使用痕の詳しい観察等が必要となってくる。川南町後牟田遺跡でも同様の資料が多く報告されており、それらとの比較も重要であろう。また、西都～清武間の遺跡群と比較した場合、角錐状石器の出土点数が多く、逆に剥片尖頭器は少ない点も、その背景等に注意が必要である。

層序	礫群	石器群	石器群の出土状況等
Kr-Kb上部	破碎した赤化礫で構成されることが多く、礫の密集度は高	船野型細石刃核・咲原型細石刃核 黒色黒曜石小形礫素材の細石刃核 等	碎片が多く伴う石器 ブロックがよくみら れる
Kr-Kb中部 ～下部	い 礫群と重なって石器ブロック	小形のナイフ形石器 角錐状石器・剥片・礫塊石器 等	
MB 1 上部 ～中部	が確認される場合多い	ナイフ形石器・角錐状石器・削器 等 ナイフ形石器には、二側縁加工、基部加工、一側縁加工（国府型）など多様性あり	
MB 1 下部		剥片尖頭器・剥片・礫塊石器 等	
A T直上		剥片・石核	
A T			
MB 2 上部 ～中部	比較的大きめの完形の円錐～ 亜角錐で構成され、非赤化礫	ナイフ形石器・剥片・碎片・石核 等	碎片を多く伴う石器 ブロックがあまりみ られない
MB 2 下部 (MB 3 上部)	も多くみられる 礫の密集度は低く散漫、遺跡	ナイフ形石器・台形様石器・剥片・石核・ 礫塊石器 等	
MB 3 下部	によっては礫の密集度が高い 場合あり	礫塊石器	
M L 3			
Kr - Aw			

表7 旧石器時代遺跡の層序と礫群・石器群の変遷

(2) 繩文時代

該当する遺物・遺構を出土する遺跡は、計22遺跡を数える（表1）。時期別の傾向として第一に指摘できるのは、早期遺跡の卓越である。遺構・遺物の出土数量から判断すると、後期・晩期がこれに次ぎ、前期・中期・および草創期がわずかに確認された。以下、時期毎に概観する。

① 草創期

わずかな遺物の確認と、当該期に帰属する可能性がある遺構の検出をみたが、全体的な様相は明確でない。青木遺跡では、隆起線文土器や尖頭器、細石刃の出土があり、その共伴関係の整理にはひろく他遺跡事例との比較をおこなう必要がある。ほかに牧内第1遺跡、尾小原遺跡出土の石鏃のなかに、その出土層位（ML 1）から草創期に帰属する可能性を指摘できる資料がある。

② 早期

出土土器に関しては、貝殻文系土器の一群と押型文系土器を中心とする一群の二者がある。遺構としては、いずれにも炉穴およびこれに類する土坑や集石遺構、散礫¹¹、陥し穴などを伴うが、遺物・遺構の出土数量や、その分布状態にみる多様性から、大きく二つの遺跡類型が認められる。一つには、広い面積のうちに、少量の土器片や石鏃、剥片類、小規模な集石・散礫などが局的に分布する様相である。しばしば、陥し穴の存在を伴う。二つには、多量の礫を擁する散礫が広範囲を覆い、その下面から集石遺構・炉穴などの遺構が多数検出される様相である。遺物の種類・

数量も相対的に増し、土器の残存も良好な状態が見受けられる。二つの遺跡類型間には、中間的様相の介在もあるが、こうした遺跡毎の差異が空間の機能差を反映する可能性も考えられる。今後、立地やより詳細な遺跡内・外の遺物・遺構の検討が求められよう。特筆事項として、野首第2遺跡から確認された押型文系土器に伴う集石遺構と炉穴は、類例も少なく注目される。

③ 前期・中期

隣接する青木遺跡・野首第1遺跡から前期の遺物が出土している。いずれも包含層の残存状況は良好でなく、伴う遺構などの様相は不明である。これら2遺跡とは立地を大きく違える老瀬坂上遺跡からも、轟式・曾根式土器が確認されたが、やはり、ほかの時代・時期と混在して確認されている。中期のまとめた資料として、昨年度の調査ではあるが、下耳切第3遺跡が挙げられる。

④ 後期・晚期

野首第2遺跡においてまとめた遺物・遺構の確認がなされた。後期を中心に晚期の資料も認められる。遺物・遺構の様相から、集落遺跡としての性格が強く、一定程度の存続期間も想定される。隣接する野首第1遺跡のほか、老瀬坂上遺跡からも後期・晚期の遺物が確認された。ほかに唐木戸第4遺跡D区、同第5遺跡、昨年度の下耳切第3遺跡からも晚期の遺物が出土している。

以上、概観した各時期の様相であるが、多々ある課題のうちのいくつかを示す。まず、草創期では、示標的な土器が無い場合の石礫などの帰属時期決定に関わる問題がある。今後、事例の蓄積とともに、各遺跡毎の厳密な出土層位の記録に留意する必要がある。早期では、夥しく出土する礫の効率的な記録・観察方法を確立する課題がある。膨大な量の礫が往時に使用された痕跡は、南九州のなかでも、宮崎平野部にとりわけ顕著であるらしく、地域性の解明につながる問題でもある。前期の遺跡は、県内の類例も数少ないが、立地環境などの点を考慮すれば、逆に当時期の特質が浮かび上がる可能性もある。また、早期と後期の遺跡が数多く、相対的に前・中期の遺跡が少ないという宮崎県域にみられる縄文時代の時期別の出現傾向は、東九州自動車道の調査においても如実にあらわれている。東日本の縄文時代と対照的なこの現象の背景も念頭におきつつ今後の調査に臨む必要がある。

(3) 弥生時代・古墳時代

本年度調査が実施された中で、当該期の遺構・遺物が確認された遺跡は半数に満たない。川南町銀座第1・第2、前ノ田第1、高鍋町野首第1・第2、老瀬坂上、唐木戸第2、新富町西畠原第1、尾小原、向原第1の各遺跡が該当する。

弥生時代中期末～古墳時代初頭では、前ノ田第1遺跡、西畠原第1遺跡、向原第1遺跡で竪穴住居跡が確認されている。前ノ田第1遺跡では、ベッド状遺構および2箇所の張り出し部をもつ弥生時代後期終末の竪穴住居跡が1軒検出された。西畠原第1遺跡でも、3軒の竪穴住居跡のうち1軒に2箇所の張り出し部が確認されている。向原第1遺跡では、6軒の竪穴住居跡が検出され、そのうち1軒は、8基の柱穴が多角形に配される弥生時代中期末の大型住居である。また、弥生時代中期末および古墳時代初頭に比定される2軒からは、遺存状態が良好な炭化材や焼土が検出されている。同様に前ノ田第1遺跡の竪穴住居跡からも多数の炭化材が出土している。このように県内で炭化材が確認された竪穴住居跡は少なく、上屋構造を復原するうえで貴重な資料と

いえる。

古墳時代中期では、野首第2遺跡で堅穴住居跡が10数軒確認されている。

古墳時代後期終末では、野首第1遺跡で堅穴住居跡が1軒検出されている。西隣で確認された横穴式石室を有する古墳（野首1号・2号墳）との関係が注目される。

遺物については、弥生時代中期末～後期の外來系土器（瀬戸内系、北部九州系等）が西畠原第1遺跡・向原第1遺跡で出土しており、他地域との交流が窺える。また、堅穴住居跡を検出したほとんどの遺跡で石包丁が出土しており、周辺に水田や畠の存在を想定することができる。

(4) 古代

川南町湯牟田遺跡・新富町音明寺第2遺跡・西畠原第1遺跡・勘大寺遺跡では、道路状遺構あるいはその側溝とみられる溝、硬化面が検出されている。多くは古代に機能した可能性があるが、出土遺物が少なく明確な時期比定は難しい。

野首第2遺跡では、縁結陶器、格子目叩き痕の残る古瓦片が出土している。遺構は南北棟掘立柱建物が2棟確認されているのみであるが、ほぼ位置を踏襲するかたちで重複しており、未調査部分に遺構が展開する可能性もある。遺跡の性格について、今後検討していかねばならない。

高鍋町老瀬坂上遺跡では、須恵器短頸壺を骨蔵器とする火葬基が見られた。

(5) 中世～近世

川南町銀座第1遺跡・前ノ田村上第1遺跡・高鍋町青木遺跡では、区画施設に囲まれた建物群が確認されている。銀座第1遺跡の溝状遺構（S E 1）は、確認面で幅2.5mを測る大規模なものである。高鍋町唐木戸第2遺跡でも、中世と推定される掘立柱建物群が検出された。

前ノ田村上第1遺跡は13世紀～16世紀代、銀座第1遺跡と青木遺跡は15～16世紀代に比定される。前二者は主要交通路の近くに、後者は小丸川沿いの要所に立地する。

高鍋町野首第1遺跡では、江戸時代後期の屋敷地の全容が明らかとなった。

古代～近世に共通する問題として、「交通路との関係」という点が浮上している。湯牟田遺跡のように道路状遺構の位置・構造を明らかにする調査はもちろんのことであるが、当時の主要交通路あるいは路線推定地と各遺跡の立地とをふまえ、人・物の流れを追求するという「点の視点から線・面の視点へのシフト」が必要である。

- 1) 通常、直径1m前後の範囲に礫が密集する「集石遺構」と比較して、相対的に広範囲に分布し、一見したところでは、構造的な特徴を把握し難い粗密様々な礫の分布をここでは「散礫」と呼んでおく。従来、この種の礫の分布状況は「礫群」と呼ばれることもあったが、後期旧石器時代の同呼称との混亂を避ける意味で、上記の呼称を探りたい。

表8 宮崎平野部縄文時代草創期～後期旧石器時代相当層の基本層序と各遺跡の状況

層	基本層序	火山灰 K~Ah	口ーA MB 0	向原1 V P, A	尾小原 IV A, C	新 IV A	西唯原2(一次) V P, A	新 IVb P, A	富 Vb P	東唯原1 Vb P	東唯原3 Vb P	東唯原2 Vb P	東唯原1(一次) Vb P	富 Vb P	西唯原2(一次) Vb P	町 Vb P, A	明寺1 Vb P, A
7	鬼界アカホトトギス																
8	黒褐色ロード																
9	所褐色ロード																
10	松島隙隙	Sz~S	ML 1														
11	褐色ロード																
12	小林原石を含む 褐色土	Kr-Kb															
13	暗褐色ロード	A	MB 0														
14	褐色ロード(?)	Y	ML 1														
15	褐色P-A(?)	P	ML 2														
16	始良I	AT															
17	始良深港	A-Tm	MB 2	X I F	X II P C	X a K											
18	始良大冢	A-Ot															
19	海褐色ロード	A	MB 3														
20	褐色ロード	A	ML 3														
21	赤褐色ロード	A															
22	鶴島アワコシ	A															
23	明褐色ロード	A	ML 4														
24	赤褐色イリオコシ	A															
25	明當褐色ロード	A															
26	キシキラロード	A															
27	始良岩戸	A-Iw															
28	越峰下駆石	A-Ky															
29	伊藤4	Asco-4															
—	86	—															

R. 例

左欄の層番号は、表2の基本層序による。ロードを意味するもの除外。

・P=土器、M=石器、MB=鉢石器、MC=棒石器、K=ナイトフロウ器、F=P=剥片尖削器、T=台形石器、S=スタレイバー、H=轟石、F'=剥片、C=瓦器。

P' = 遷移器、PC = 遷移器

・織耕は未列入として記入していない。

表8 宮崎平野部縄文時代草創期～後期旧石器時代相当層の基本層序と各遺跡の状況

層	基本層序	火山灰 K-kh	高				熊				木戸1				木戸3				北牛牧5				野首2				川南町						
			牧内2	牧内1	小並1	鹿木戸4	熊	鹿木戸3	熊	鹿木戸1	熊	北牛牧5	熊																				
7	見界アカホヤ	M B 0																															
8	黒褐色ロード・A	M B 0	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A	V P, A				
9	前褐色ロード・A	Sz-S	ML 1																														
10	板鳥塗厚																																
11	褐色ロード・A																																
12	小林路石含合土 褐色土	Kr-kb																															
13	時褐色ロード・A	M B 1	Vh K, Kh	Vh K, Kh	Vh K, Kh	Vh M B + M	Vh M B																										
14	黒褐色ロード・(Y-T)	ML 2																															
15	始良Tn	AT																															
16	時褐色ロード・A	M B 2	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H	X F, H			
17	始良深堆	A-Ym																															
18	始良大窓	A-0t																															
19	時褐色ロード・A	ML 3																															
20	褐色ロード・A	ML 3																															
21	赤褐色ロード・A																																
22	鶴島アオコシ	Kr-Aw																															
23	明褐色ロード・A	Kr-1w																															
24	鶴島イワコシ	Kr-1w																															
25	明黄褐色ロード・A																																
26	キンキラコロード・A																																
27	始良治戸	A-1w																															
28	清流下絆石	Kr-Ay																															
29	阿蘇4	Aso-4																															

凡例

- ・地層の層番号は、表2の基本層序による。ローラーブランチ等ごとに層序。
- ・P = 土壌、A = 石版、MB = 砂石版、MC = 砂石堆積、K = 角砾状石質、Kh = ナイフ形石質、V = 砂質、FP = 剣片尖頭器、TP = 台形石器、T = 三棱尖頭器、S = スクレーパー、H = 帽石、F = 刃石、C = 石核、P T = 破片、C = 破片
- ・複数は原則として記入しない。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第76集

平成15年3月

**東九州自動車道（都農～西都間）関係
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ**

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印 刷 株式会社エス アイ エス
〒880-0852 宮崎県宮崎市高洲町50-4
TEL 0985-27-8899 FAX 0985-28-3025
